

である。事実うるさい曲でこのような仕掛けをしても効果は全くない。

以上、少ないがア)、イ)、ウ)、の三つを挙げてみた。しかし、これはコードの特徴であって進行ではない。むしろ、慣用的に変化をつけている。おそらく、こういった音の動きをさせようと思って、このようなコードを決めたのではなく、こういう音使いをしたら、こんなコードになってしまったという感が強い。

さだまさしのコードの変化というものは、ギター・アレンジの上で生まれてきたものである。だから、G、A、D、Emのコードが出て来ただけで、先程のように変化してしまったり、分数コード(Em/Dといったもの、分母はベース音を表す)という得体の知れぬものが頻繁に出てくる。しかし、しっかりと落ち着いた曲で、この進行を聴くとやはりウムムとうなってしまいそうになる。やはり、これは、さだまさしの曲のコード面においての特徴だ。

エ) 譜に書かなくても判ると思う。いわゆる3コードだけの曲。主に短長だけで、長調にはない進行。非常に単純だが、それだけに詩が全面的に出てくる。また、サビの部分、テーマの部分で、この3コードを使っている曲もある。しかし、長調には見られない。

短調にみせるさだまさしの3コードは、単純であるが、単調でなく、非哀感を感じさせているという面で、さだまさしのコード面での特徴だ。

(長調にないというのは、さだまさしの曲についてのことでお間違いない)

さだまさしのコード進行というものは、従来の理論通りで特異な点はない。むしろ、詩と、声に個性があるようだ。けれども、実際にレコードを聞いてみると独特の響き、節まわしを持っているように思える。

彼の曲は見たところ非常に素朴で飾り気がない。けれども、単純ではない。やはり、個性と、センスを備えているのだと思う。譜をよくみると、コードの一つ一つに気を使っていることがよく判る。つまり、コードに変化をつけているのだ。他のシンガー・ソング・ライターは元より、作曲家でも手を加えないコードにも、懇切丁寧に手を加えているのが判る。

GM7 CM7 Bm7 Em9 Am7 Bm7
CM7 B M7 D9 GM9 D6 GM9

「SUNDAY PARK」

どこがどうなってどうなっているのか、考えてみて下さい。

3. 音使い

さだまさしの場合、次の二つが、特徴的な音使いである。

①音が上昇するとき一度半音下がる。また、一度その音を、半音下げたのち、再び元の音に戻す。又、半音上がるものもある。

こういったものはごろごろしている。おそらくさだまさしは無意識のうちに使っていると思われる。

サビへ入るときには、十中八、九はこの音使いを行っている。平凡だが、レコードを聞いていると、成程な、と思うことがある。

②さだまさしの曲では、十六分音符がよく出てくる。速いメロディラインか、同一音の連打のときに使われる。下は同一音の連打(「もうひとつの雨やどり」と、速いメロディライン(「パンプキンパイとシナモン・ティ」)の例。

上段「もうひとつの雨やどり」 下段「パンプキンパイとシナモン・ティ」

※もう一つ、コードの分解音のフレーズも挙げられるが、特徴とは言えないので、省くことにする。

☆さだまさしで行われる転調 ———— 研究中に判ったので、ここに書いておく。

さだまさしの曲の中で正式に転調しているのは、45曲中、1曲しかない。桃花源である。

Am D7 G (D7) A D A

上は桃花源の転調部分である。見ての通り、ト長調から、半音上の、変イ長調に転調している。少し白々しい気もするが、やむを得まい。

しかし、さだまさしの曲を研究していくうち、転調している曲はこれだけじゃないということに気が付いた。

これは、LP帯法来に収められている「冗句」である、



上の譜で、 の部分は、key・GのII m7、V7。 の部分は、key・AのII m7、V7と思われる。

このとき、 の方のII m7は、Am7で、 の方のII m7はBm7となっている。つまり、A→Bという風に、一音上がっている。これを意識して、「冗句」を聞いてみると、成程なと思う筈である。興味のある人は、友達に録音してもらおうと良い。ここに書いてある限りでは、こじつけ臭いが、耳で聞くとなかなかどうして、りっぱに転調している。

☆脱線ついでに、さだまさしのギター・アレンジにおける彼の特徴を見てみようと思う。



「線香花火」のイントロ



「雨やどり」のイントロ

独特の音使い、指使いだと思う。こういった例は沢山あるが、この2曲は特に、どぎついものだと思う。他には、わざとハイ・コードを使ったり、カポをつけて高音だけ鳴らしたりするものもある。大体、彼の特徴が最も強いのは、上のような符割りのアレンジである。特異な音の飛び方、リズムは、彼ならではのものだ。

4. グレーブ時代との違い

音使いが全く違う。いわゆる、コードの分解音で、メロディが作られている。今の方が流麗で、聞いていて安心感がある。

そもそもグレーブはフォーク・グループとしてデビューしている。その為かどうかは関係ないが、初期の頃は、イモ臭い感じがある。その理由はいろいろあるだろうが、おぼこい声も一因だと思う。その為、非常に幼稚で、軟弱な曲が多い。しかし、中には今の曲の感じと同じようなものもあって、コンサートでは歌い続けているようだ。もう一つの共通点は、調が、殆んどがト長調 (key, G) の曲であるということ。そして、グレーブ時代との違いは、さっきも言った通り、音使いが違う、というより、下手であるということ。

IV 結 論

- ・構成においては、2つの主な構成があるが、それは詞の構成の影響を受けている。
- ・一つのコードに懇切丁寧に手を加えている。
- ・メロディの音域が変化する時、半音分、変化する。(Ⅲ、3①と②)
- ・十六分音符が続く、速い、メロディの動き。

V 総 括

誰かの曲や、文章、絵、作品などを研究するのは非常に難しいものと思った。特に、さだまさしの曲について、などというのは前例を知らないの、どうやって調べていこうか、考えていこうか、など、判らないことばかりであったけれども、何とか、自分なりにまとめることができた。

曲というのは、歌があってもなくても、その人の自己表現の現れであると思う。さだまさしの曲というのは、彼の、二十何年か生きてきた人の、自己表現、主義、主張であるから、その半分程しか生きていない僕が考えたところで、所詮は知れたものだ。けれど、知れたものという風に形容されている分については、僕が考えたものであるから、この研究は無駄ではなかったと思う。

現在、雨後のタケノコのように、いろんな人がデビューしているようだが、みんながみんな売れるわけではない。どんな人の曲でも、そこには、その人の表現が成されているのだから、立派なものだと思う。本だってそうだと思う。どんなに売れない本でも、その作者は一生懸命書いた筈だ。でも、売れないものは、全く売れない。どうしてだろう。

いい曲というのは、いい表現と同じ、つまり、その人自身に問題があると思う。現在、売れていない歌手というのは、その人は立派であっても、表現力に欠けていると思う。実際、売れている歌手、シンガーソングライターで、表現力の乏しい人は1人もいない筈だ。

今回、さだまさしの曲の研究をしていて、そのことを強く感じたので、総括として書いておこうと思う。今後、このような研究をやりたいと思う人は、自分も、多少は表現できる場、手段を一つぐらい持っている方が、研究し易いと思う。兎角、僕の研究はこれで終わることになる。御拝読、どうもありがとう。